

で、中世以降の遺構であることは間違いない。SD373 や SD929 溝跡を切って掘り込んでいることからも中世から近世にかけての遺構と考えられる。

4 鶴の木館と内城館の復元

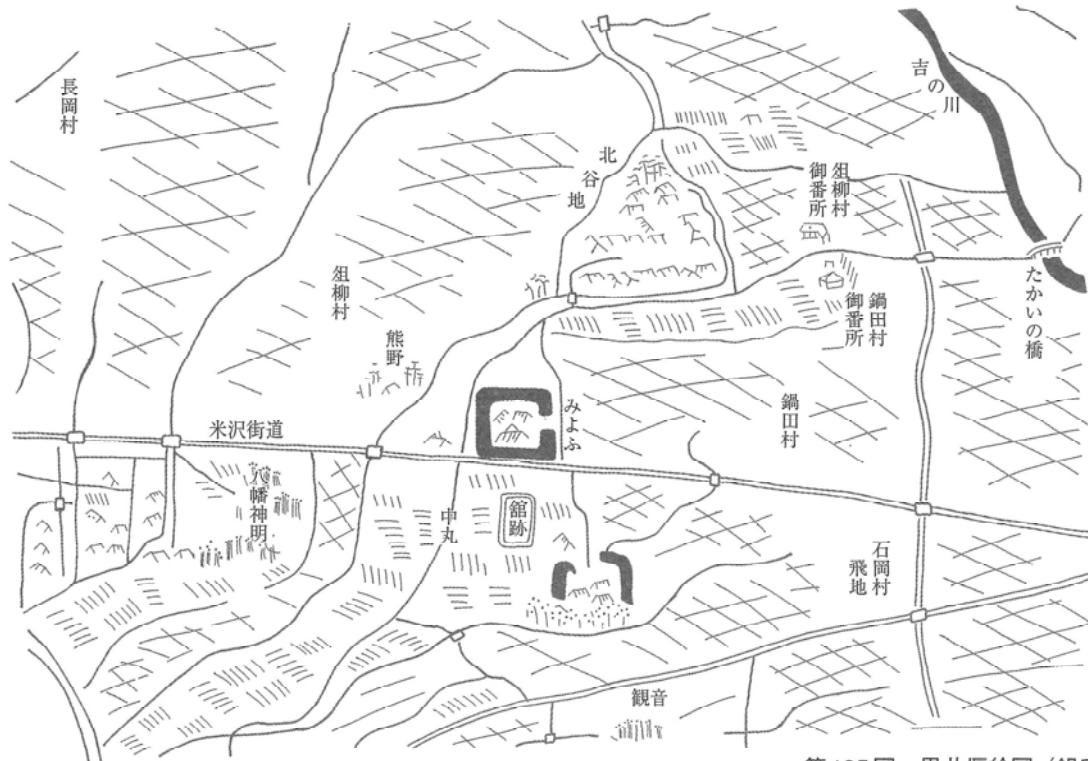
(1) 調査成果から

今回の鶴の木館跡の発掘調査から、字「内城」に所在する館跡の堀跡及び、館跡外側に広がる建物跡を検出した。さらに西端には堀跡あるいは水路跡と思われる中世以降の溝跡が見つかった。「中世城館跡分布調査報告書」の鶴の木館は、調査区の東区及び南側の水路により区画された区域にあたり、「中世城館跡分布報告書」内にある内城館は字「中丸」には確認できず、字「内城」に所在し西側の堀跡を部分的に調査した。「中世城館分布調査報告書」での位置の変更が必要である。調査によって内城館の西側に中世以降の建物が配置することが明らかとなり、柱の配置や間取りから数時期にわたる建物群が存在することがとらえられた。2つ館跡の正確な位置と館外の建物などの遺構の様子を捉えることができたのは一つの成果と言える。

(2) 絵図・地籍図にみる館跡

地 種 図 寛政九年（1797）の『黒井堰御絵図』（米沢市立図書館蔵）に鶴の木館や内城館、熊野館の掘や土壘が描かれており、近世中期の鶴の木周辺の様子を知ることができる（第135図）。絵図を詳しく見ると米沢街道の東側に「みょう」と記された堀に囲まれた屋敷、西側に「館跡」と堀で囲まれた屋敷（鶴の木）がみえる。青く表現された堀に囲まれた屋敷跡の中には3棟ほどの建物が描かれており、置賜盆地に広く分布する屋敷堀を持つ豪族屋敷（田屋）に近い存在と考えられる。一方「館跡」と記された所はすでに施設はなく廃墟として土壘が残されたところで、近世以前の城館の可能性が高い。「黒井堰絵図」には、このような館跡・屋敷跡が幾つか描かれている。

南陽市市役所に保存されている明治22年作成の地籍図でこれらの該当する地域を調べたところ、同じく3箇所の館跡を確認することができた。黒井堰に表れた「館跡」は字「内城」に



第135図 黒井堰絵図（鍋田周辺）
〔米沢市立図書館蔵より作図〕

相当し、「みょう」は字「熊之前」に相当した。もう一箇所の堀に囲まれた部分は字「鶴之木」にあたる。地籍図による土地割りからも館の形状が伺え、ほぼ絵図に近い状況であることがわかった。これらの館跡は「中世城館分布調査報告書」にも記載されているが、分布図での位置がズレていると判断される部分もあり、「中世城館分布調査報告書」に載る内城館の実際の位置は字「内城」になり、鶴の木館はより南側の現集落に重なり、「熊の前館」は絵図にある「みょう」に相当すると理解した。

文献資料

(3) 文献史料から

天文7年（1538）9月の『伊達植宗御段錢帳』・天文22年（1553）の『伊達晴宗公采地下賜録』や天正13年（1585）の『北条段錢帳』には、中丸郷の記載があり、長岡・組柳・中の目を含む地域を指していることが伺え、現在も字「中丸」の地名が残されている。前述した文献によれば中丸郷には、きつねさき在家・みょう在家・さい藤在家・ていまつ在家などの在宅が「中丸」記載されている。また、伊達家臣であった湯目氏文書（東北大学所蔵）には、中野目在家・那智阿弥陀在家・館の内在家・右京在家等が記されている。

天正18年（1590）10月、森田惣右衛門・大齊信濃・大窪美濃・矢内藤兵衛の四名が「中丸おとな」に北条中丸の田錢取立について書状を出している。これら四名は伊達政宗から知行地として「中丸」を与えられた人物であろうか。文書に出てくる「おとな百姓」は名主の後進としての家格を持ち、下人や小百姓を使って経営する有力な農民であったと考えられる。在宅とよばれる有力農民（おとな百姓）の中には10軒もの名子をかかえる土豪クラスのものもいたようで、川西町犬川の環濠屋敷などは、このような土豪クラスのおとな百姓の館屋敷と考えら



れる。南陽市内に残っている館・屋敷には一部堀跡が残っているものもあり、土豪クラスの有力農民の屋敷跡と捕らえられるものが多く含まれているようである。先に示した寛政年間の「黒井堰絵図」に記載されている方形に堀跡として黒く囲まれた屋敷は、中世末から近世にかけての有力農民（おとな百姓、土豪）の跡として考えられ、「鶴の木館」もその一つとして理解できよう。

「享保の村絵図」や「黒井堰絵図」に館跡と記された内城館は、在家の屋敷跡とは表記の違いがあること、字「中丸」に隣り合っていること、規模が大きいことなど、そして先述した段錢帳などの中世末の文書等から天文年間前後に造られた館跡と推測しておく。館主については、天文22年（1594）の『伊達晴宗公采地下賜録』にある伊達家臣栗野弥八郎なる人物が浮かび上がってくるが、湯目七郎左衛門との知行関係もありはっきりとしない。

(4) 形状復元

① 鶴の木館

形状 堀跡は、現況から北・東・西の3辺が確認される。地籍図や空中写真を参考に、堀の規模・形状の復元を試みた。その範囲を示したものが第137図である。合わせて第136図に地籍図を掲載した。堀の一部は近年まで生活用水としても利用されていたことが分かる。

鶴の木館の推定復元の結果、北辺は推定長は80m。東辺は軸線がくい違いになりつつ、推定長は75m。南辺の推定長は72m、西辺は湿地帯だったのが明治期にため池に改築され、現在は埋め戻されている。推定長は82mとなる。よって内部の推定面積は約5800m²であり、形状は僅かに北が狭くなるがほぼ方形に近い。鶴の木館跡は東側に入り口を有する平地に存在する単郭式方形館であり、南北44間×東西46間となる形状に復元される。

② 内城館

形状 堀跡は、現況から南・西の2辺が確認される。地籍図や空中写真を参考に、堀の規模・形状の復元を試みた。堀は埋め戻しされて耕地として整地され、南部分に関しては用水路として利用されている。

以上推定復元の結果、北辺は推定長は125m。東辺は入り口部分を含みながら、推定長は75m。南辺の推定長は125m、西辺は、一部発掘により検出できた。推定長は80mとなる。よって内部の推定面積は約9750m²であり、形状は僅かに東側が狭くなるが長方形に近い。内城館は東側に入り口を有する平地に存在する単郭式方形館であり、南北42間×東西70間となる東西に長い方形の形状に復元される。

16～17世紀

年代 SD 880 堀跡埋土中から出土した陶磁器片は16点あるが、堆積土下層のF3～4から出土した陶器片は肥前・唐津系陶器と考えられ、16世紀後半の年代が推定される。

土器や文献からの年代観はそれほど矛盾せず、内城館は16世紀～17世紀初頭の幅で捉えられる。



第137図 字切図による館跡復元図

第25表 邑鑑等にみる中世後期の村々

▲やしろの庄

○下長井白川より南

●中丸は俎柳近郷と思われる。中丸は俎柳の小字名にもある。

村名	邑鑑 文禄年間の調査 (2,252~2,255)			伊達稙宗御段銭古帳 天文7年9月3日 (2,198)	伊達晴宗公采地下賜録	天文22年正月17日 (2,213) (伊達家庭介集の研究 小林 宏著)
	村高	戸数	総人口			
小瀬	458.59	33	187			
萩	427.70	59	318			
金山	936.66	65	433	(金) かね山	17貫205文▲	(北条) (金) (内湯村 図書) ほうとうかね山のうちゆのむらつしょ知行のとをりのこさず (ゆのめ七郎さあもん) (北条) (金) (内) (村) ほうとうかね山のうち湯のむら藤十郎ふん、平ハ在け、す、め在け (右 同人) [大津土佐・将監在城]
宮内	2,763.96	349	1,456			
中山	1,700.25	72	434	中	9貫100文▲	(屋代) (在) (小築) (屋張) わしろ中山の内五けんさいけのこさざこやな川をハリの守殿 (屋代) (刈) (栗野右衛門) やしろ中山のうち、たいの在け、うきめん三千がり、ひかけ在けあハのあもん
小岩沢	237.62	22	122			
川越	870.01	101	522			
池黒	956.46	22	171	(池黒) いけぐろ	6貫510文▲	(北条) (池黒) ほうといけくろの内大町ふん、ほりとめ在け、したの在け、 (おしま戦入) なかほりの在け、をしま在け、なかのやしき (池黒) (中野 常陸) いけぐろの内、たての在け不残 (なかのひたちの介)
漆山	1,509.07	56	311			
羽付	531.03	11	46	(羽付) はねつき	8貫925文▲	
梨郷	2,911.91	128	468	(片岸) かたきし	23貫225文○	(梨郷) (湯村) 下長井りんこうのうちかたきしにゆのむら藤七ふん、 (須江) かう大在け、なしの本在け (すゑ五郎兵へ) (片岸) (湯村 大之助) (小島 岩見) かたきしの内ゆのむら大いのすけふん (おしまいはミ) (片岸) (中) (常陸) かたきしの内、地蔵田山ち四郎の本堤 (なか野ひたちの介) (片岸) (湯) かたきしの内きり田三千かり符はたけ (ゆの村くに松)
赤湯	611.29	43	189			
二色根	452.58	16	64			
三間通	731.35	29	116			
柄塚	503.87	19	110			
長岡	401.87	18	95			
俎柳	379.11	13	59	●中丸	12貫500文▲	同庄なかまろのうち、なかのめ在け、なきあみ在け、たての在け、うきやう在け
中野目	363.38	15	49			
鍋田	516.90	26	78			(半分) (仕置) (湯) (左衛門) きりたはたけいつれもんはんふんつ、くたしをき (ゆの目七郎さあもん) (屋) や代の庄なか丸のかうはら肥前ふんきつね在け、さい藤在け、みやう在け、 (粟) ていまつ在けをのくたしをき候也 (あは七郎のやや八郎)
大橋	292.64	26	105	大橋	2貫705文▲	(屋代葉茂) (枝郷) (南) (北) (湯目) (左衛門) やしろつもえたかうみなみ大橋、きた大橋のこさず (ゆのめ七郎さあもん)
中落合	418.94	12	58	(落合) をちあひ	9貫735文▲	おちあい藤衛門ふん北条おきあいの内こさず (小築 尾張) (こな川をハリの守殿)
西落合	246.90	8	43			
荻生田	485.62	17	87			
浦生田	1,028.68	32	121			
若狭郷屋	300.00	14	46			
島貫	167.52	4	14			
高梨	398.60	25	91			
郡山	753.46	26	112			
長瀬	300.36	9	62	(長瀬) 北条なかとう	4貫175文▲	(法師 柳) 北条なかとうの内ほうしやなぎ在け (松木ないき) (瀧) (庄司乳母) 長井北条の内、長とろ五間しやうしば (中野常陸介)
閑根	649.21	29	160	(根) 閑ね	9貫500文○	(根) (小原郷部) 下長井せきねのうちおはらかもんふん田中在け、 川はた在け、きたやま在け、てうふん、きやうつか (小島) (石見) やち、きり田六百かり (おしまいはミ) (長井閑根) (栗野衛門) 下ながいせきねの内すき下在け (あハのあもん) (井閑根) (森屋伊賀) 下長いせきねの内もりやいかふんきやうき在け (森) 同じにせきね在けまこ平在け (塙もりかも左衛門)
				(橘) 露はし	4貫250文○	(橘) (小々高 以助) 下長井露はしの内とみつかあふみふん (こゝたか大いのすけ) (橘) (信濃) 下長井露はしの内いち川しなのふんけん長井北条くら田又四部分不残下置候 (松本但馬守) (彦左衛門) (坂内ひこさあもん)

〔1981鍋田郷土史をもとに作成〕

引用参考文献

- | | | |
|----------------------------------|--------------|---|
| 仲田茂司 | 1997 | 「東北北海道における古墳時代中後期土器様式の編年」『日本考古学』第4号
日本考古学協会 |
| 古川一明・白鳥良一
村田 晃一 | 1991 | 「2土器の編年 8東北」『古墳時代の研究』6 雄山閣 |
| | 1995 | 「宮城県における6・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会 |
| 菅原 祥夫 | 1998 | 「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群」「古代の」稻倉と村落・郷里の支配』奈良文化財研究所 |
| 高橋 信一 <small>ほか</small>
山中 雄志 | 1987
2000 | 「蛭館跡」「母畑地区遺跡発掘調査報告」23 福島県教育委員会
「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相 前・後」『福島考古』40・41 福島考古学会 |
| 吉田博行・古川利意 | 1992 | 『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書 北遠面遺跡』会津坂下町文化財調査報告書第26集 会津坂下町教育委員会 |
| 横須賀倫達 <small>ほか</small> | 2002 | 『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告1 麻生館遺跡』福島県文化財調査報告書第404集 福島県教育委員会 |
| 柴田陽一郎 <small>ほか</small> | 1990 | 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書V 手取清水遺跡』秋田県文化財調査報告書第190集 秋田県教育委員会 |
| 吉田博行・古川利意 <small>ほか</small> | 1990 | 『若宮地区遺跡発掘調査報告書 大江古屋敷遺跡』会津坂下町文化財調査報告書第16集 会津坂下町教育委員会 |
| 井 憲治 <small>ほか</small> | 2003 | 『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2 荒屋敷遺跡』福島県文化財調査報告書第405集 福島県教育委員会 |
| 井 憲治 <small>ほか</small> | 2004 | 『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告3 荒屋敷遺跡(2次)』福島県文化財調査報告書第415集 福島県教育委員会 |
| 手塚 孝 | 1998 | 『大神窯跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第57集 米沢市教育委員会 |
| 長井政太郎 | 1973 | 『新訂 山形県地誌』中央書院 |
| 佐藤 鎮雄 <small>ほか</small> | 1990 | 『南陽市史 上巻』地質・原始・古代・中世 |
| 佐藤 鎮雄 <small>ほか</small> | 2003 | 『図説「置賜の歴史」』郷土出版社 |
| 木本 元治 <small>ほか</small> | 1991 | 『東北横断自動車道遺跡調査報告12 屋敷遺跡』福島県文化財調査報告書第262集 福島県教育委員会 |
| 阿部明彦・高桑弘美 | 1999 | 『山形県の古代土器編年』第25回 古代城柵官衙遺跡検討会資料 古代城柵官衙遺跡検討会 |
| 石井 浩幸 <small>ほか</small> | 1999 | 『山形県の一般集落の様相』第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料 古代城柵官衙遺跡検討会 |
| 佐藤鎮雄 佐藤庄一 <small>ほか</small> | 1986 | 『南陽市史』考古資料編 南陽市 |
| | 1981 | 『日本地名辞典』角川書店 |
| 鍋田郷土史編さん委員会 | 1985 | 『鍋田郷土史』 |
| | 1938 | 『東置賜郡史』東置賜郡教育会 |